

五十嵐康男先生の学風*

井 上 徹

1. はじめに

私はこれまで 20 年以上にわたり、五十嵐康男先生とお付き合いさせていただいていますが、成城大学文芸学部英文学科の学部時代と成城大学大学院文学研究科の大学院時代に五十嵐先生から直接英語学研究的の指導を受けるといふ幸運にあずかりました。成城大学の学生の中では、先生と直接接する機会が最も多かった卒業生の一人だと自認しておりますが、その私が先生のご退職に際し、先生のお人柄や学問に対する態度について見たり感じたりしてきたことを述べさせていただきます。

2. 五十嵐康男先生との出会い

五十嵐先生と初めてお会いしたのは、私が成城大学に入学した 1982 年秋のことのことでした。ロンドン大学での研修を終えて帰国されてからのことです。アポもなく研究室を訪ねた私に嫌な顔一つされずに相手をして下さり、五十嵐 (1982, 1983a) で紹介されているロンドンの生活のことを伺ったことを昨日のことのように思い出すことができます。

このように、先生にお会いしたのは大学入学後のことでしたが、実際に先生を存じ上げたのは大学入学の数年前のことで、ラジオ「百万人の英語」

の放送を通してでした。

深夜に「百万人の英語」を一人で聞いていた私は、あるコーナーになると可笑しくて吹き出してしまうのです。そのくせ番組が終ったあと不思議と習ったことが頭に入っているのです。そのコーナーを担当されていたのが五十嵐先生でした。

番組では、先生は主に英会話や英検対策のコーナーを担当されていました。先生の軽妙な語り口は、時折聞こえてくる共演しているネイティブ・スピーカーの笑い声でもわかります。ユーモアたっぷりの話し方とご自身の海外での生活体験を基にしたお話に引き込まれたリスナーは多かったのではないのでしょうか。「マイクの前で一人であれだけ盛り上がるができる人は五十嵐さんくらいのものだ」とは後で聞いた、ある先生の五十嵐先生評でした。

大学に入学してから五十嵐先生に教えていただいたことは数限りないのですが、先生にお会いする前の数年間に「百万人の英語」を通じて英語のスキルだけでなく、英語文化に関することをたくさん教わりました。英検などのマジメな講座では難しいイディオムや英文読解の方略を、リスニングの時間にはイーグルスやボブ・ディランの歌詞の説明を、“緊急英会話 Emergency 50”ではドレッシングの名前から病気や薬の名前まで、場面にあわせた英語を教えていただきました。どんな難しいことも先生の手にかかるとやさしく料理されて、頭にすっと入るのですから驚きです。

ちょうど一般の人が自由に海外旅行や留学に行けるようになった時代で、学校では習わないけれど、旅行やホームステイをしているときに使えるような英語や海外旅行のサバイバル術を先生は教えて下さいました。当時、先生のアドバイスに恩恵を受けた方はたくさんいたはずです。

リスニングに関しても、先生は専門用語などは全くお出しにならずに、「唇をまるめて、指が2本タテに入るくらいの口を開けて「オ」といいます」

とか「[「クルシイーッ」というときの「ク」の音です]といったぐあいに、どんな人にもわかるやさしい言葉を使って発音の仕方を教えてくださいました。先生は番組に頻繁に出演され、ついにはご自分の名前を冠した英会話の著書まで上梓されることになりました（五十嵐 1984）。タイトルに自身の名前が入り（それも一番大きな活字で！）表紙に自身の写真がついた本を出版された英語学者は他にいないのではないのでしょうか。

3. フェスティナ・レンテ^{ゆっくり いそげ}

何ごとにも前向きで人の悪口を絶対言わない先生は、学生を出来・不出来に関係なく公平に扱ってくださいました。先生の学生に対するスタンスは、学生を未熟な子どものように扱うのと違って、同じ学問を志す同志のように、学生を対等の立場で扱ってくださいました。後年、留学中にアメリカの大学の先生と付き合った際、しばしば五十嵐先生のことを思い出しました。

そんな先生の教え方を一言でいうと「空気の教育」といった感じでしょうか。どんな場合にも学生の自主性を尊重し、ご自分からああしろこうしろという指示を出されたことはほとんどなかったのではないかと思います。また、先生は目先のことにとらわれず、我々学生の能力を信じ、辛抱強く我々の成長を見守ってくださいました。私は先生から、教育とは長い目でみれば確実に身を結ぶもの、という堅い信念のようなものを教わりました。私たちゼミ生は、先生から「教育」を受けたというより「感化」を受けたといった方が正しいかもしれません。先生に感化を受け、英語教員になった五十嵐ゼミの卒業生も少なくありません。

4. アンチ権威

私の学部時代、五十嵐ゼミではテキストを一つに決めることなく、学生が自分でテーマを決めて発表する形式をとっていました。何を発表しても自由なのですが、発表者も発表の担当になっていない人もみんなが発表について必ず自分の意見や感想をいうことが義務付けられていました。その際に気をつけなければいけなかったことが3つあったように思われます。

1つは、ふだん着のことば使いを心がけることです。私たちはややもすると人前になると知ったがぶりをして学術的な話し方になってしまいがちです。ふだん自分が使わないようなことばを使って、「××が顕著に見られます」などと言おうものなら「ケンチョねエ？」などと先生に揶揄されてしまいます。どんな難しいこともよく考えて、自分の身の丈にあったことばで表現するようにとの示唆ではなかったかと思います。

2つ目は *overgeneralization* (過剰一般化) の戒めです。我々はあることを表現するときに自分の狭い経験だけでものごとを決めつけてしまう傾向があります。誰でもある種の *bias* を持つてものごとを表現するのですが、一事を万事に広げてしまう *prejudice* には十分気をつけるように、経験 (証拠) の限られていることを断定してしまわないようにとの助言です。視野を広くもつために常に心を開いておくようにとのありがたい教えでした。

3つ目は本節の表題である「アンチ権威」のすすめです。上ですでに述べたように、ゼミの発表では発表の内容が自分のことばで十分に咀嚼できているかという点と自分が興味の対象をどう思っているのかということが重要視されていたと思います。その道の権威が言ったからといって自分の意見のように言ったり、人の言ったことを鵜呑みにするとすぐに注意されてしまいます。人の説を知ること重要だが自分の関心はどこにあるのかをよく見極めてから出発するようにとの適格なアドバイスは、私の学問に

対する態度に大きな影響を与えてくれました。

先生の反権威主義が決して学生向けのアドバイスでないことは、私と先生の共通の知人である T 先生からうかがった逸話～五十嵐先生が教育大時代、ある大先生がおっしゃったことを何の遠慮もなく否定されて周りのみんながあっけにとられた～にもみられます。また、その昔ラドーが日本に講演にきたとき、ラドーの言うことを疑問も持たずにありがたがって聞いている日本人を批判するコメントを（五十嵐 1972 の一部で）お書きになっています。私自身も JACET（大学英語教育学会）の第 29 回大会で「転換期の大学英語教育」と題するシンポジウムに出席した際、先生のアンチ権威主義を目の当たりにしました：パネリストである英語教育で著名な方があることを発表したところ、同じくパネリストである我が恩師はご自分の発表の番になって「ベルリンの壁の崩壊と日本の英語教育のどこが関係あるんですかね、、、。」とおっしゃったのです。大言壮語を嫌い、権威主義を嫌う五十嵐先生にはあの時はどきどきはらはらせられました。

なお、*overgeneralization* の戒めとアンチ権威主義については、五十嵐 (1985b, 1985c) の教育時評があり、当時先生が我々学生や学会の動向をみて、日本人に特有といってもよい単一の思考法と権威主義について警鐘を鳴らされたのではないかと推察しております。

5. 言語学のポピュライザー

長年「百万人の英語」の講師を勤めていらっしゃったからか、JACET の理事や顧問として大学英語教育の改善に貢献されてきたからか、五十嵐先生は学会などで「英語教育」の専門家として紹介されることがあります。そんな場面に出合うとき私は違和感を感じてしまいますが、英語の変種の研究を通して日本人がどんな英語を身につけるべきかを一貫して考えてこ

られたのですから、「英語教育の専門家としての五十嵐先生」もあながち間違いとは言えないのかもしれませんが。

五十嵐先生といえば、JACET で音声言語研究会の代表者として活躍されてきたことや音声学に関する多くの論文を発表されてきたことからわかるように実験音声学や調音音声学の分野で活躍されてきた音声学者なのですが、一般には言語学の啓蒙書をたくさん書かれていることで有名です。以下では「言語学のポピュライザー」としての五十嵐先生について触れたいと思います。

五十嵐先生は、ライオンズ（田中監訳 1973）の『現代の言語学』の音声学・音韻論関係の論文を翻訳を皮切りに、田中春美先生他との共著『言語学入門』（1975）、『言語学のすすめ』（1978）、『言語学演習』（1982）という言語学3部作を出版されました。この3部作は、それまでなかった共同執筆という形の言語学の入門書としてどれも大変な好評を博し、『言語学入門』は東大をはじめとする多くの大学でテキストとして使われたといえます。

私が高校時代に拝読して言語学に興味をもった『言語学のすすめ』は中国でも翻訳された入門書ですが、言語学プロパーの記述が半分で、文字、社会、文化、文学、心理、論理と数理という関連領域の記述が大幅に加わり、入門書の中の入門書というか、自由にどこにでも立ち寄れる「言語学のデパート」といった感じの本でした。（もちろん現在でも入手可能です。）『言語学演習』は『言語学のすすめ』と同じメンバーによる著作で、各分野のポイントと用語解説と練習問題からなり、大学院を受験する人には必読の書でした。

特に、『言語学入門』は「コトバの姿をありのままに記述することを目的とした、正統的な言語学を学ばせようとしている本」として町田（1999）（巻末の読書ガイド（「本格的に言語学に挑戦したい人のために」））で取り上

げられ、五十嵐先生の音論の章は「音声学や音韻論部分の解説はくわしく丁寧」(180頁)と書評されているくらい、高い評価を得ています。

かつて田中春美先生は、なぜ言語学の入門書を書くのか尋ねられて、言語学の面白さをできるだけ多くの人に理解してもらいたいから、と発言されたことがあります(久保田 1984)。この言葉は、成城の授業や研究指導で私が学んだ五十嵐先生の学問のスタンスと一致しています。言語学の中心となる各分野の理論の基礎を学ぶこと、言語学で学んだ知識を実際の英語教育に役立てること、英語教育に必要な社会言語学や心理言語学や談話分析などの関連分野の基礎研究をすすめること、の3本柱です。

五十嵐先生といえば音声学の学者というイメージで誰しもみているかもしれませんが、大学・大学院の授業やゼミでは音声学の他に、アメリカ英語とイギリス英語、談話分析、社会言語学、心理言語学を講じられたように守備範囲の大変広いご研究をされてきました。私が学部の卒論で談話分析を取り上げたのも、修士論文でイギリス英語とアメリカ英語の複合語の形態的相違を取り上げたのも先生の授業に影響を受けたからです。

五十嵐先生が音声学以外にもいろいろな分野に造詣が深いことを示す一端として、『言語学のすすめ』で音声学・音韻論を執筆されている他に第6章の「言語と社会」を分担執筆されていること、88年の『現代言語学辞典』で音韻論と言語教育を担当されていること、94年の『入門ことばの科学』で発音記号を解説した章の他に「発話の意味」と題する語用論の章を担当されていることからもうかがい知ることができます。常に新しいことに挑戦し続ける先生は今から15年ほど前に大学院で David McNeill の *Psycholinguistics: A New Approach* (1987) を読んだ際、ASL (American Sign Language) の章に並々ならぬ関心を示され、熱心に手を動かして手話とそれが表す意味について実験されていたことを思い出します。

6. 音論～マクロな視点のすすめ

一般の人への言語学の啓蒙というお仕事と「理論と実践と関連分野の研究の統合」という先生の学問に対する真摯な態度を述べてきましたが、先生の学問を特徴づけるものとして独創性をあげることができます。これは先生の開拓者精神と反権威主義と結びついていて、一言でいい表すならマクロ的視点のすすめ、とでもいえるかと思います。

リスニングの過程をまとめた論考（五十嵐 1983c）で先生は、会話の聴解における知覚と理解の相互関係のみとめ、両方をふくめて「ヒアリング」という日本的な言い方は便利なものだという発言をされています。これは先生のものを見方を示す一つの例ですが、世間ではややもすると否定的に取られているものの本質を見直し、再評価をする姿勢を示していると思います。また、先生の著書に登場する、音声学と音韻論を含めた広い概念をあらわす「音論」¹という先生の造語も先生の独自性を表しています。

最近の言語学ではコーパスによる研究が隆盛を極めていて、書き言葉だけでなく、話し言葉も研究の対象になってきていますが、ことばの90%以上を占める話し言葉（音声言語）へは十分な関心が払われているとは必ずしも思われません。これにはチョムスキー以降の研究で言語学における文法（論）の領域が拡大されてきたことと関連していると思いますが、音声言語に関する学際的でダイナミックな視点の重要性を「音論」が表しているのだと私は理解しています。

現代の言語学は分野ごとに細分化されていますが、五十嵐先生のマクロ的視点はミクロ的視点を否定するのではなく、多くの基本を共有しているものとして捉えることができます。音声言語に関する問題をトータルに扱ってこういう視点は将来的にもっと真剣に考えられてよい点ではないかと思います。

7. おわりに

五十嵐先生は「はじめに話し言葉ありき」という至極当然な見方から出発し、英語の変種の研究を通して日本人がどんな英語を身につけるべきかという研究をされてきました。先生の音声言語としての英語の研究の成果は、論文や著書は言うまでもなく、専門家用に書かれたリスニング教材の書評や一般用に作られた発音教材などで随所に見られます。

私たち弟子は先生のお人柄や学風に触れ、自分たちの学問の研究だけでなく人間形成に多大な恩恵を受けてきました。大学院時代の五十嵐ゼミの後輩である早川麻実さんのことばを借りれば、「雨の日も風の日も灯台のように（我々の人生に）明かりをともし続けて下さった」という感じがしています。言語の楽しさ、面白さ、奥深さを教えて下さった先生に心からお礼を申し上げたいと思います。

注

- * 本稿の内容に関して、過去のノートや資料にあたり、できるだけ正確な記述を務めたつもりですが、思わぬところで考え違いをしているかもしれません。五十嵐先生や読者の方々には予めそのことをお断りしておきたいと思います。
- 1 「言語の音声面を研究する分野を指す名称。現在では、言語の音声面の研究は、音声学と音韻論とに戴然と区別されているが、音韻論が未発達な時代には、これらの語ははっきり区別されないで用いられていた。ドイツでは、音声面の研究分野を指すのに、これらの語の代わりに本来のドイツ語の語 **Laut**（音）と **Lehre**（学問）を用いて **Lautlehre** と称した。「音論」は、おそらくこの語の訳である。現在、音声学と音韻論は別の学問であるが、相互に密接な関係をもつので、言語の音声面にかかわるこれらの二つの研究分野を称するの、「音論」は便利な名称であるが、一般的にはあまり用いられない。なお、**Lautlehre** は、現在は音声学の意味で用いられることが多い。」（『現代言語学辞典』p.445-446）

参考文献

- 五十嵐康男. 1984. 『五十嵐康男 緊急英会話スペシャル Emergency 50』
（百万人の英語スペシャルシリーズ）東京：日本英語教育協会.
- . 1972. 「ラドー博士連続講演会」『現代英語教育』第8巻、12号、17.
- . 1982. 「ロンドンの下宿生活より」『成城だより』第81号、16-19.
- . 1983a. 「ロンドンのことば」（海外論考探訪(53)）『英語教育』第31巻、
12号.
- . 1983b. 「ヒアリングの枠組み」（海外論考探訪(54)）『英語教育』第31
巻、13号.
- . 1985a. 「良い職業と「聖職者」」『現代英語教育』第22巻、7号.
- . 1985b. 「アンチ権威」『現代英語教育』第22巻、8号.
- . 1985c. 「Overgeneralization の戒め」『現代英語教育』第22巻、9号.
- . 1986. 「最近のテープ教材から」『現代英語教育』第23巻、4号.
- 久保田美昭（構成）. 1984. 「言語学者との一時間<田中春美氏>」『言語』
第13巻、4号.
- 町田健. 1999. 『言語学が好きになる本』東京：研究社.
- ライオンズ編著（田中春美、五十嵐康男、倉又浩一、樋口時弘、村田勇三郎
訳）. 1973. 『現代の言語学<上>』東京：大修館書店.
- 田中春美、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完、樋口時弘. 1975.
『言語学入門』東京：大修館書店.
- 、樋口時弘、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完、下宮忠雄.
1978. 『言語学のすすめ』東京：大修館書店.
- 他. 1982. 『言語学演習』東京：大修館書店.
- 、樋口時弘、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完、下宮忠雄、田
中幸子（編）. 1988. 『現代言語学辞典』東京：成美堂.
- 、樋口時弘、家村睦夫、五十嵐康男、下宮忠雄、田中幸子. 1994. 『入
門ことばの科学』東京：大修館書店.